

住吉宮町遺跡

第37次調査

発掘調査報告書

2003

神戸市教育委員会

住吉宮町遺跡

第37次調査

発掘調査報告書

2003

神戸市教育委員会

序

六甲山南麓は瀬戸内海に面し気候が温暖で人々が暮らすのには適した環境です。ここ東灘は、早くから市街化が進んでいった地域ですが、近年はマンション開発等により地下に埋もれている文化財が発見され新しい事実が解明されています。

住吉宮町遺跡は、今までの調査により、弥生時代以降、人々が営みを続けてきた地域であることがわかつてきました。特に、古墳時代中期から後期にかけて集落が形成され、その周辺に古墳が累々と築かれていることが次第にわかつてきました。

今回の報告書は、民間マンション建設に先立つもので、住吉宮町遺跡の一端をかいまみる資料の発見となりました。今後も調査が増えると、さらなる歴史の様相が解明されることが期待されます。

今回の調査成果をまとめた本書が、地域の歴史研究、あるいは文化財の保護・普及啓発の資料として、今後、市民の皆様はじめ、多くの方々に広くご活用いただければ、幸いです。

最後にはなりましたが、発掘調査ならびに報告書の作成にご協力いただきました事業主である近畿菱重興産(株)をはじめ、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成15年12月
神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市東灘区住吉宮町6丁目15-13に所在する住吉宮町遺跡第37次調査の発掘調査報告書である。
2. この調査は、DIAESTA MIO住吉壱番館建設事業に伴うもので、神戸市教育委員会が近畿菱重興産株式会社からの委託を受けて、現地調査を平成14年9月18日から平成14年11月20日にかけて実施したものである。調査対象面積は約900m²である。平成15年度に神戸市西区に所在する神戸市埋蔵文化財センターにて出土遺物の整理、金属製品の保存処理並びに発掘調査報告書の作成をおこなった。
3. 現地での調査および本書の作成は神戸市教育委員会学芸員 井尻格が担当した。金属器関係については、神戸市教育委員会学芸員 中村大介が担当した。
4. 現地での遺構写真撮影は調査担当者が行った。遺物の写真撮影は、独立行政法人奈良文化財研究所 牛嶋茂氏の指導の下、杉本和樹氏(西大寺フォト)が行った。また遺物のX線写真については、中村が撮影した。
5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「西宮」の一部及び、神戸市発行の2千5百分の1地形図「住吉」を使用した。
6. 本書に使用した方位・座標は平面直角座標系第V系(日本測地系)で、標高は東京湾平均海水面(T. P.)で表示した。
7. 現地の発掘調査は(株)アコードに委託して実施した。
8. 現地での発掘調査および遺物の整理にあたっては、近畿菱重興産株式会社の費用負担と協力を得て実施した。ここに記して感謝いたします。

目 次

序

例言

目次

| | |
|-----------------------------|----|
| I.はじめ | 1 |
| 1.住吉宮町遺跡の立地と概要 | 1 |
| i) 遺跡の立地 | 1 |
| ii) 歴史的環境(周辺の遺跡) | 2 |
| 2.遺跡の概要とこれまでの調査の成果 | 4 |
| 3.調査に至る経緯と経過 | 6 |
| i) 調査に至る経緯 | 6 |
| ii) 調査経過 | 6 |
| iii) 調査組織 | 7 |
| II.第37次調査の成果 | 8 |
| 1.基本層序 | 8 |
| 2.弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物 | 10 |
| i) 遺構面の概要 | 10 |
| ii) 遺構と遺物 | 10 |
| 3.古墳時代後期・平安時代前期の遺構と遺物 | 13 |
| i) 遺構面の概要 | 13 |
| ii) 遺構と遺物 | 14 |
| 4.平安時代後期の遺構と遺物 | 17 |
| i) 遺構面の概要 | 17 |
| ii) 遺構と遺物 | 17 |
| III.まとめ | 19 |

挿 図 目 次

| | |
|-----------------------------------|---|
| 図1 住吉宮町遺跡位置図 | 1 |
| 図2 周辺の主要な遺跡分布図 | 3 |
| 図3 第37次調査地点と周辺の調査地点 | 4 |
| 図4 挿図写真 発掘調査で測量する中学生(トライヤル) | 6 |
| 図5 挿図写真 調査作業風景 | 6 |
| 図6 調査区設定図 | 7 |

| | | |
|-----|---------------------|----|
| 図7 | 土層断面設定図 | 8 |
| 図8 | 12区 北壁土層断面図 | 8 |
| 図9 | 2区 北壁(東側及び西側)土層断面図 | 9 |
| 図10 | S K302・S K303出土土器 | 10 |
| 図11 | 黒褐色砂質シルト層出土土器 | 10 |
| 図12 | 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構平面図 | 11 |
| 図13 | 黄橙色砂層出土石器 | 12 |
| 図14 | 黄橙色砂層出土土器 | 12 |
| 図15 | 12区 S D202実測図 | 13 |
| 図16 | S D201・S D202出土土器 | 14 |
| 図17 | 13区 S B201実測図 | 14 |
| 図18 | 古墳時代後期・平安時代前期の遺構平面図 | 15 |
| 図19 | 13区 S A201実測図 | 16 |
| 図20 | 13区 S A202実測図 | 16 |
| 図21 | 黒褐色シルト層出土土器 | 17 |
| 図22 | 平安時代後期の遺構平面図 | 18 |
| 図23 | 茶褐色シルト混じり砂層出土土器 | 19 |

写 真 図 版 目 次

住吉宮町遺跡遠景(北から) 平成11年撮影

| | | | |
|-------|------------------------|-------|----------------------------------|
| 写真図版1 | 1区 S K301・S K302(北から) | 写真図版6 | S K303出土土器 |
| | 13区 S K303・S K304(東から) | | S K302出土土器 |
| 写真図版2 | 12区 S D202とピット列(北西から) | | 黒褐色シルト層出土土器 |
| | 13区 S D201(西から) | | 黒褐色砂質シルト層出土土器 |
| 写真図版3 | 13区 第2遺構面全景(東から) | 写真図版7 | 黄橙色砂層出土土器 |
| | 13区 第2遺構面全景(西から) | 写真図版8 | S D201出土土器 |
| | 13区 S B201(南から) | | 黒褐色シルト層出土土器 |
| 写真図版4 | 13区 第1遺構面全景(東から) | | S D202出土土器 |
| | 13区 第1遺構面全景(西から) | 写真図版9 | 黄橙色砂層出土石器 |
| | 13区 S A201(西から) | | 24はSD201、43は茶褐色シルト 混じり砂層出土鉄製品 |
| 写真図版5 | 1区 第1遺構面全景(南から) | | 茶褐色シルト混じり砂層出土土器 |
| | 3区 北壁土層断面 | | |

I. はじめに

1. 住吉宮町遺跡の立地と概要

i) 遺跡の立地

住吉宮町遺跡は、神戸市東部の市街地に位置する遺跡である。神戸市東灘区住吉宮町3・4・6・7丁目、住吉本町1・2丁目、住吉東町4・5丁目の東西約750m、南北約650mの範囲にかけて広がる遺跡である。

神戸市の市街地は六甲山系によって東西に細長く形成され、この六甲山系南麓では、中小河川によって形成された扇状地や沖積地が発達している。当遺跡は六甲山系に源を発する住吉川と石屋川によって形成された複合扇状地の末端に立地する。

現在では、急激に市街地化が進み景観が変わってしまったが、明治18年測量の仮製地形図では遺跡の周辺は水田が広がっていたことが判明している。これまでの調査でも、洪水時の堆積砂や流路・土石流の痕跡が確認され、住吉川の氾濫により幾度となく土砂の堆積が繰り返され、複雑な土層堆積を呈している。なお、遺跡が立地している標高は20m～25mの緩斜面地である。

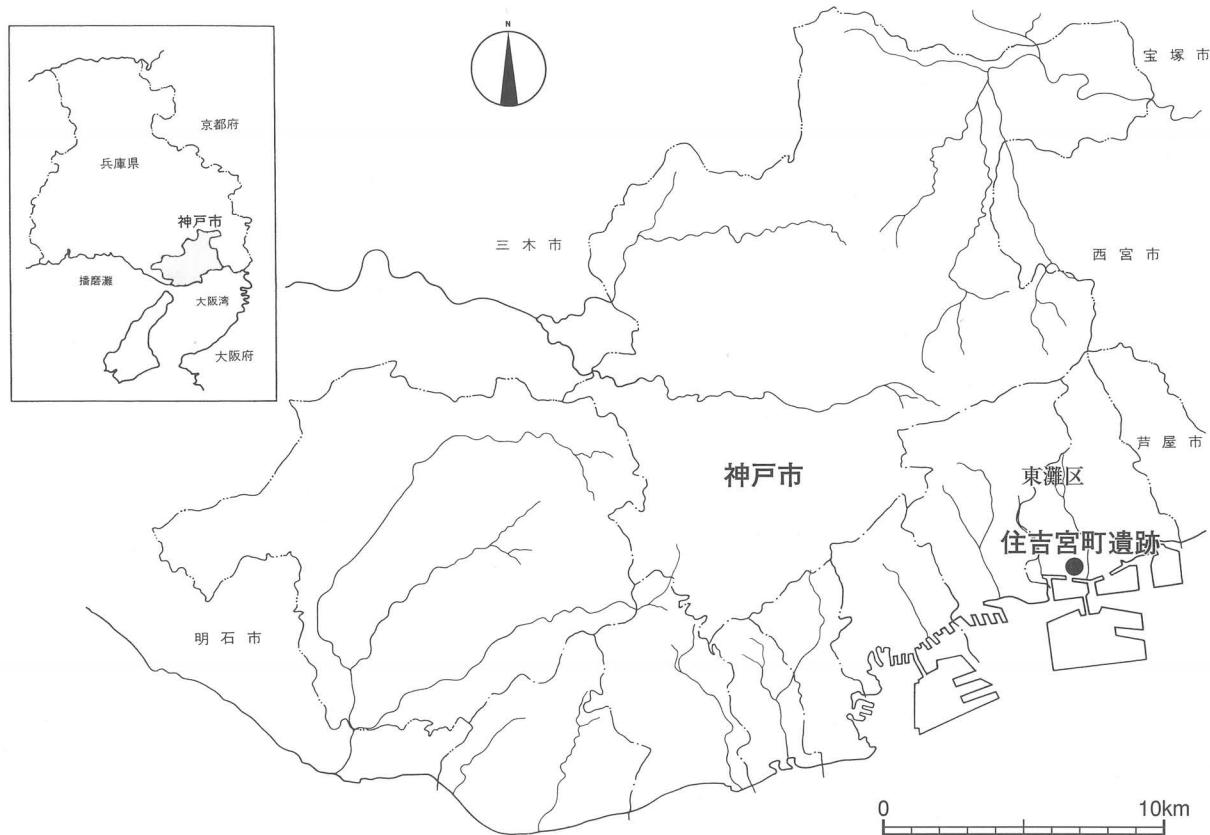


図1 住吉宮町遺跡位置図

ii) 歴史的環境（周辺の遺跡）

住吉宮町遺跡の所在する神戸市南東部地域は、東の芦屋市と隣接し六甲山南麓で市街地化が早くから進んだため遺跡の存在が余り周知されていなかった。近年の開発に伴い、遺跡の調査が増加し新たな発見を見ることとなった。以下、神戸市南東部地域の遺跡を中心に概要を記す。

旧石器時代 神戸市東部地域においてこの時期に該当する明確な遺構は見つかっていないが、西岡本遺跡⁽¹⁾で石器が出土している。

縄文時代 標高3mの沖積低地に立地する本庄町遺跡⁽²⁾は自然堤防上に立地し、縄文時代後期の貯蔵穴を数基確認し、集落址と考えられる。

弥生時代 臨海部の砂堆上に広がる前期中頃の集落の可能性がある北青木遺跡⁽³⁾、前期前半の水田遺構が確認されている本庄町遺跡、扇状地末端部に広がる本山遺跡⁽⁴⁾では前期前半の流路が確認され、近畿地方最古段階に属する土器や木製品が出土している。中期から後期にかけて六甲山丘陵上には会下山遺跡⁽⁵⁾、金鳥山遺跡⁽⁶⁾のような高地性集落が営まれ、祭祀遺跡である保久良神社遺跡⁽⁷⁾などもある。一方、低地の深江北町遺跡⁽⁸⁾では円形周溝墓が築かれ、中期～後期の方形周溝墓や前漢鏡を出土した森北町遺跡⁽⁹⁾がある。この頃平野部での居住域が拡大し、岡本北遺跡⁽¹⁰⁾、住吉宮町遺跡⁽¹¹⁾、郡家遺跡などで集落が出現する。

古墳時代 前期になると海岸線に沿って大型の古墳が築かれるようになる。東から順に、円墳と推定される芦屋市の阿保親王塚古墳⁽¹²⁾、前方後円墳の東求女塚古墳⁽¹³⁾、前方後方墳の処女塚古墳⁽¹⁴⁾・西求女塚古墳⁽¹⁵⁾が造られる。また、段丘面上では前方後円墳のヘボソ塚古墳⁽¹⁶⁾が知られる。

中期中頃から後期前半にかけて、住吉宮町遺跡内で数多くの円墳・方墳等の古墳が築かれ、それに混じって、前方後円墳の坊ヶ塚古墳⁽¹⁷⁾帆立貝式の住吉東古墳⁽¹⁸⁾のような盟主的な古墳が現れてくる。

後期後半以降になると、段丘面上に小規模な古墳が密集して築かれるようになる。岡本梅林古墳群⁽¹⁹⁾・西岡本遺跡⁽²⁰⁾や郡家遺跡下山田地区⁽²¹⁾のような横穴式石室を主体とする群集墳が出現する。本来、芦屋市の山麓部から東灘区南西部の段丘面上には横穴式石室を持つ古墳が多数存在していたと思われる。また、この頃の集落は、住吉宮町遺跡や郡家遺跡などが拠点的集落として存在し、森北町遺跡、深江北町遺跡でも同時期の住居址が確認されている。

奈良・平安時代 近年の調査で深江北町遺跡⁽²²⁾からは、「驛」と書かれた墨書き器、承和の年号が記された木簡、円面硯、帶金具等が出土し、また、大型の掘立柱建物の柱穴が検出されていることから、葦屋駅家跡として注目されている。同じ性格を持つ芦屋市津知遺跡⁽²³⁾でも大型の掘立柱建物、皇朝鏡、円面硯など官衙的色彩の強いものが出土している。住吉宮町遺跡⁽²⁴⁾では「橘東家」「免」と記された墨書き器が出土し、菟原郡衙との関係が推定できる。郡家遺跡の大蔵地区⁽²⁵⁾では、奈良時代の大型の掘方をもつ掘立柱建物が確認されていて、付近に、官衙的建物の存在を窺わしている。



図2 周辺の主要な遺跡分布図 (S=1:25000)

- | | | | | |
|------------|------------|------------|-----------|-------------|
| 1. 住吉宮町遺跡 | 2. 坊ヶ塚古墳 | 3. 住吉東古墳 | 4. 郡家遺跡 | 5. 東求女塚古墳 |
| 6. 魚崎中町遺跡 | 7. 甲南町遺跡 | 8. 本山遺跡 | 9. 井戸田遺跡 | 10. 本山中野遺跡 |
| 11. 小路大町遺跡 | 12. 北青木遺跡 | 13. 深江北町遺跡 | 14. 本庄町遺跡 | 15. 森北町遺跡 |
| 16. 坂下山遺跡 | 17. 東山遺跡 | 18. 森奥遺跡 | 19. 金鳥山遺跡 | 20. 保久良神社遺跡 |
| 21. 岡本梅林古墳 | 22. 扁保曾塚古墳 | 23. 岡本東遺跡 | 24. 岡本北遺跡 | 25. 西岡本遺跡 |

2. 遺跡の概要とこれまでの調査の成果

昭和60年度の共同住宅建設に伴い、当教育委員会により初めて遺跡の存在を確認した。今日までに37次の発掘調査と試掘調査の結果により弥生時代中期から近世に至る集落や古墳等が立地している複合遺跡と判明している。

遺跡の名称となっている住吉宮町は、神戸市東灘区の南部地域に位置し、行政的には東は芦屋市、西は灘区と接している。近世までは兎原郡住吉村に属していた。ここは、旧住吉村の一部で、「和名抄」の兎原郡住吉郷の遺称地である。

住吉宮町遺跡は、今回報告する調査を含めて37次に及ぶ調査が実施されている。今までの調査で確認されている最も古い遺構は、弥生時代中期の竪穴住居址である⁽²⁶⁾。弥生時代後期になると居住域が拡大し^{(27) (28)}、弥生時代後期末には遺跡全域まで広がっている。

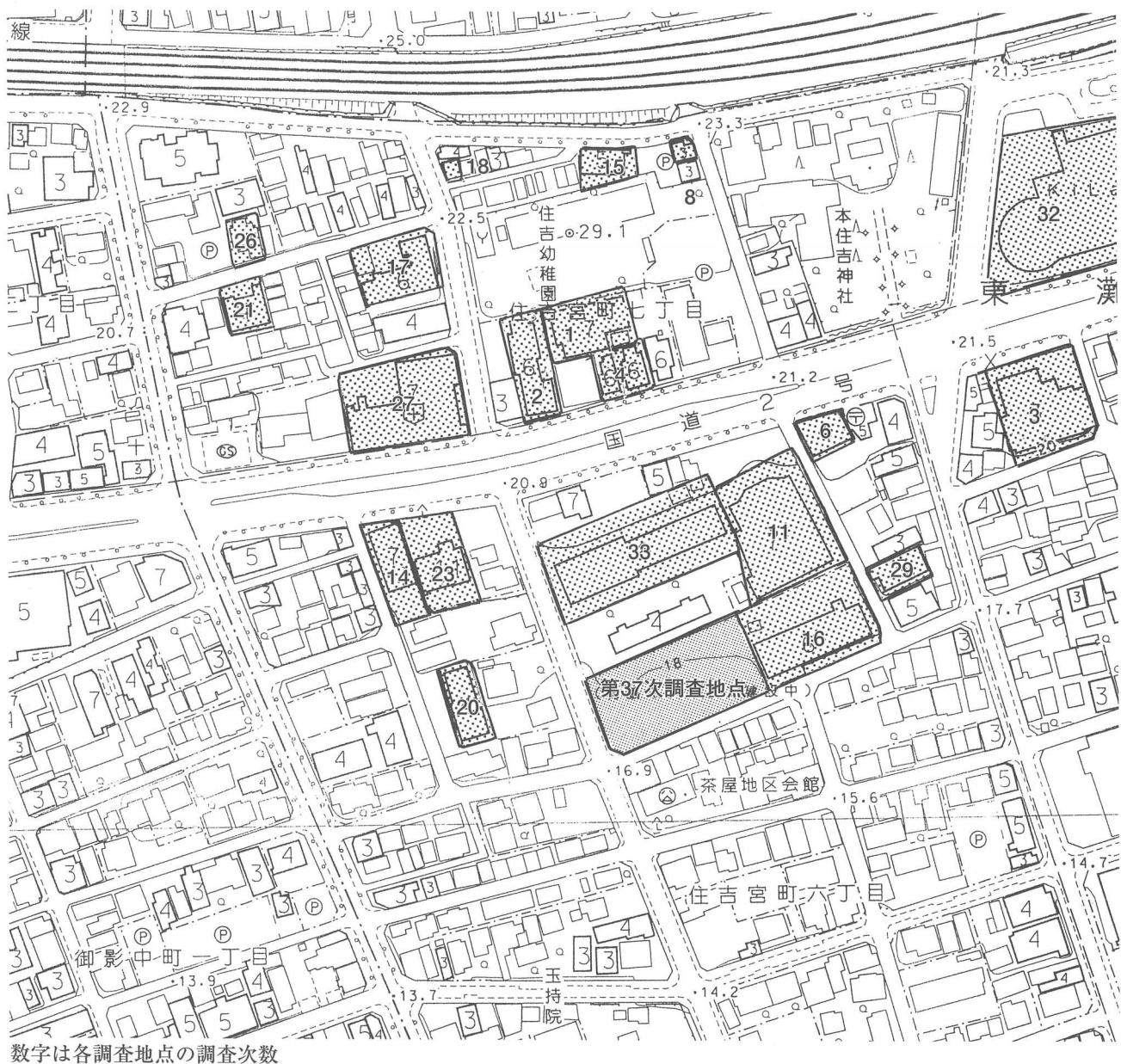


図3 第37次調査地点と周辺の調査地点 (S=1:2500)

古墳時代中期には古墳の造営が始まり、この頃の住居址も発見されていることから、古墳時代前期に途絶えた居住域が再び形成されていた。そして古墳の造営も6世紀前半をピークにし、円墳や方墳など200基近い古墳が築かれたと考えられる。また、前方後円墳と考えられる坊ヶ塚古墳⁽²⁹⁾や帆立貝式古墳の住吉東古墳のような規模の大きな古墳も出現している。

奈良時代から平安時代の居住域は、JR神戸線より南側の範囲に集約される。第23次調査では、官衙的な性格を含んでいる「橘東家」「免」と記された墨書き土器や土馬・円面鏡・瓦などが出土した。また同時に地震によって井戸枠の上半部が大きく倒壊した井戸が検出された。

平安時代以降には、第11次調査で、地鎮遺構を伴う掘立柱建物を確認し、また、第16次調査⁽³⁰⁾では、平安時代頃の掘立柱建物、同時代後期の河道などが確認している。

近世になると、花崗岩を石材として掘り起こし加工した痕跡が確認された採石遺構が発見されている（第11次調査）。

註

- (1) 浅岡俊夫『神戸市東灘区西岡本遺跡』六甲山麓遺跡調査会 2001
- (2) 別府洋二編 兵庫県文化財調査報告第92冊『本庄村遺跡』兵庫県教育委員会 1991、他
- (3) 小川良太・山下史朗 兵庫県文化財調査報告第36冊『北青木遺跡』兵庫県教育委員会 1986
- (4) 菅本宏明・石島三和『北青木遺跡発掘調査報告書 - 第3次 - 』神戸市教育委員会 1999
- (5) 安田滋『本山遺跡第18・19次調査』『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
- (6) 村川行弘・石野博之・森岡秀人『増補 会下山遺跡』奈良明新社 1985
- (7) 新修神戸市史編集委員会編『金鳥山遺跡』『新修 神戸市史』歴史編 自然・考古 1989
- (8) 新修神戸市史編集委員会編『保久良治神社遺跡』『新修 神戸市史』歴史編 自然・考古 1989
- (9) 山下史朗編 兵庫県文化財調査報告第54冊『深江北町遺跡』兵庫県教育委員会 1988
- (10) 黒田恭正『森北町遺跡』『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988
- (11) 六甲山麓遺跡調査会『神戸市東灘区岡本北遺跡』 1992
- (12) 安田滋編『住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001
- (13) 森岡秀人『阿保親王塚古墳』『兵庫県史』考古資料編 1992
- (14) 渡辺伸行『東求女塚古墳』『昭和57年度埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1985
- (15) 神戸市教育委員会編『史跡処女塚古墳』1985
- (16) 安田滋編『西求女塚古墳第5次・第7次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1995
- (17) 新修神戸市史編集委員会編『ヘボソ塚古墳』『新修 神戸市史』歴史編 自然・考古 1989
- (18) 菅本宏明『坊ヶ塚古墳試掘調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (19) 丹治康明他『住吉宮町遺跡第9次調査』『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- (20) 新修神戸市史編集委員会編『東灘区のその他の遺跡』『新修 神戸市史』歴史編 自然・考古 1989
- (21) 『西岡本遺跡第2回現地説明会資料』六甲山麓遺跡調査会 1989
- (22) 山口英正『郡家遺跡下山田地区第4次調査』『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1996
- (23) 山本雅和・阿部敬正・中谷正『深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書』 2002

3. 調査に至る経緯と経過

i) 調査に至る経緯

第37次調査地点は、東灘区住吉宮町6丁目15-13に所在し、国道2号線から南へ100m程下った標高約18m付近に位置している。今回の調査対象地に、近畿菱重興産株式会社からDIAESTA MIO 住吉壱番館のマンション新築工事計画により、埋蔵文化財試掘調査依頼書が提出され、それに基づき神戸市教育委員会文化財課は平成14年7月4日に試掘調査を実施した。調査では、5箇所設定した試掘坑のうち4箇所から弥生時代・古墳時代後期の遺物包含層を確認した。今回の調査結果に基づき、開発区域の全域で発掘調査が必要であるとの回答を行った。平成14年7月18日に発掘調査依頼書が提出されたため、事業面積2,006m²のうち、建物基礎の地中梁及び杭部分、駐車ピット部分の工事により遺跡の破壊される約900m²について発掘調査を実施することとなった。

ii) 調査の経過

発掘調査は平成14年9月18日から平成14年11月20日の約2ヶ月間で、建設工事により掘削される約900m²について実施した。調査を進めるにあたり、掘削残土置場の都合から対象地を一度に掘削するのは不可能であったため、まず敷地南側の建物本体部分のうち東半分（1区から8区）について9月18日から9月24日にかけて重機により、近・現代の盛土層と近世から中世の旧耕土層の掘削を行い、あわせて残土の搬出を行った。

10月2日に駐車ピットになる13区の重機掘削を行い、調査を開始した。10月18日から2区の西半分と3区の西半分、9区から12区の重機掘削を開始し、24日に調査の完了した1区から8区までを掘削残土により埋め戻しを行った。

11月11日から11月15日にかけてトライやるウイークの中学生合計5名（須磨区横尾中学校・竜が台中学校）を受け入れて調査作業を実施した。

なお4区～10区は工事実施の際の遺構に対する影響レベルが現況地表面から160cmの深さまで、また、1区～3区・11区については現況地表面から200cmの深さまでであるためそこまで調査を行い、それより下層の遺構面については現地保存している。また、12区・13区については全ての遺構面について調査を実施している。

11月19日には遺構等の図化作業を終了した。そして11月20日に、現地での調査は終了した。



図4 発掘調査で測量する中学生（トライやる）



図5 調査作業風景

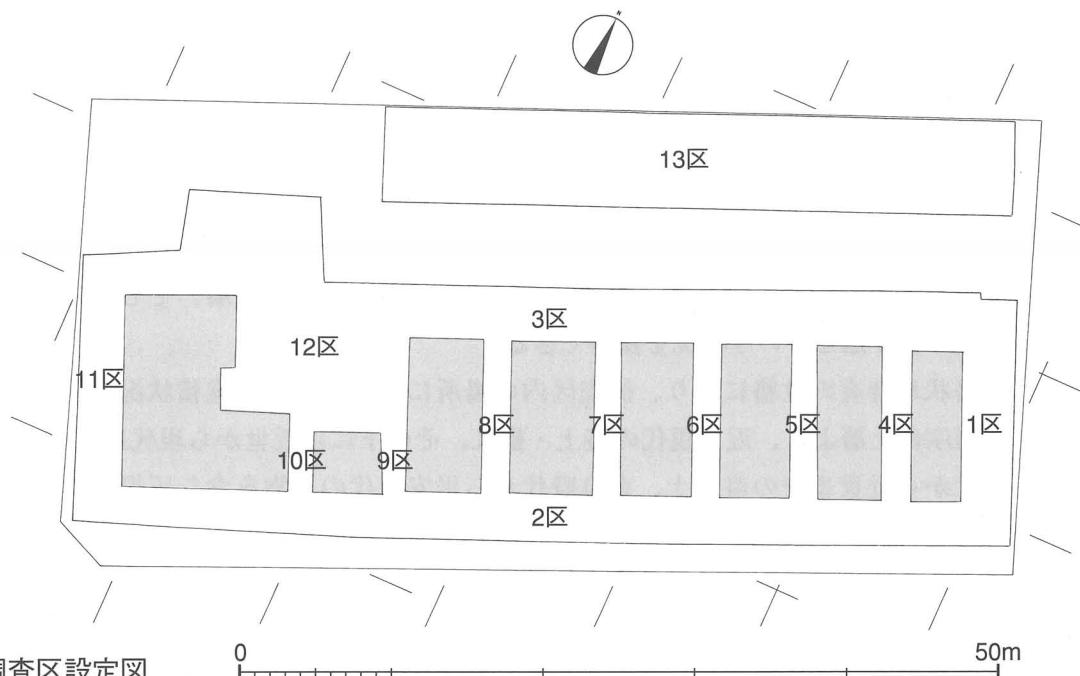


図6 調査区設定図

平成15年度は、神戸市埋蔵文化財センターにおいて、出土遺物の洗浄・復元・図化・写真撮影等を行い、併せて発掘調査報告書刊行に関する業務を行った。

iii) 調査組織

現地における発掘調査は、平成14年度に近畿菱重興産株式会社から委託を受け、神戸市教育委員会が実施した。また、平成15年度には、出土遺物の整理と報告書作成業務を行った。これらの調査・整理に伴う組織は以下の通りである。

[平成14・15年度] 神戸市文化財保護審議会 史跡・考古資料担当

檀上 重光 前神戸女子短期大学教授

工楽 善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長（平成14年度）

大阪府立狭山池博物館館長（平成15年度）

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教 育 長 西川和機

社会教育部長 岩畔法夫（平成14年度）高橋英比古（平成15年度）

教育委員会参事 桑原泰豊（平成14年度文化財課長）

（文化財課長事務取扱）

社会教育部主幹 宮本郁雄・渡辺伸行

埋蔵文化財調査係長 丹治康明

文化財課主査 丸山 潔・菅本宏明・千種 浩

事務担当学芸員 内藤俊哉

調査担当学芸員 井尻 格

保存科学担当学芸員 中村大介

遺物整理担当学芸員 関野 豊（平成14年度）

II. 第37次調査の成課

1. 基本層序

今回の調査区は、全体に北東から南西に向かって緩やかに傾斜した地形に立地している。住吉川の氾濫による度重なる洪水によって大量の土砂が運ばれ、場所により堆積層の違いは見られるが、基本的に砂質層の上層が土壤化した層、そしてまた砂質層の堆積の繰り返しという状況を観察できる。

扇状地特有の性格により、調査区内の場所によっても土層堆積状況が異なるが、基本層序は上層より、近・現代の盛土・攪乱、その下には近世から現代にまでの耕作土、中世から近世までの耕作土、奈良時代から平安時代の遺物を含む灰褐色シルト混じり細砂層、第1遺構面を形成する黄褐色細砂～粗砂層（古墳時代の遺物を含む洪水砂）、古墳時代後期の遺物を含む土壤化した黒灰色シルト層、第2遺構面を形成する淡灰褐色細砂層、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を含む土壤化した黒褐色シルト層、第3遺構面である褐色粗砂混じりシルト層となる。これらの下層については、部分的に調査したが、湿地状堆積を呈する灰黒色シルト質細砂層が確認できるが、いずれも遺物を含んでいなかった。

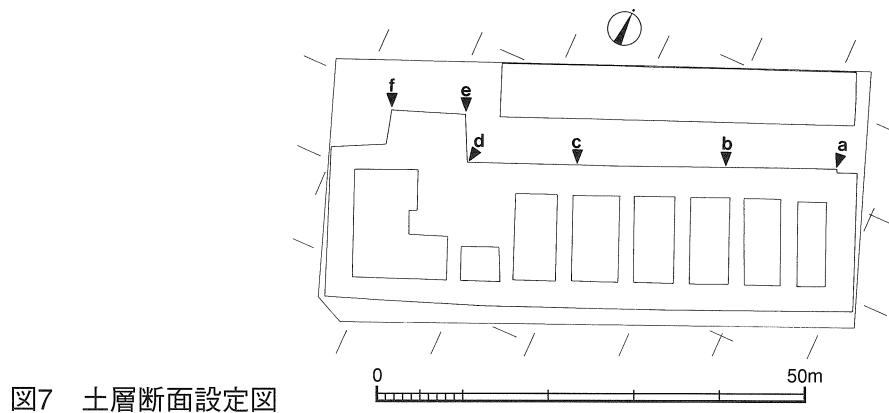
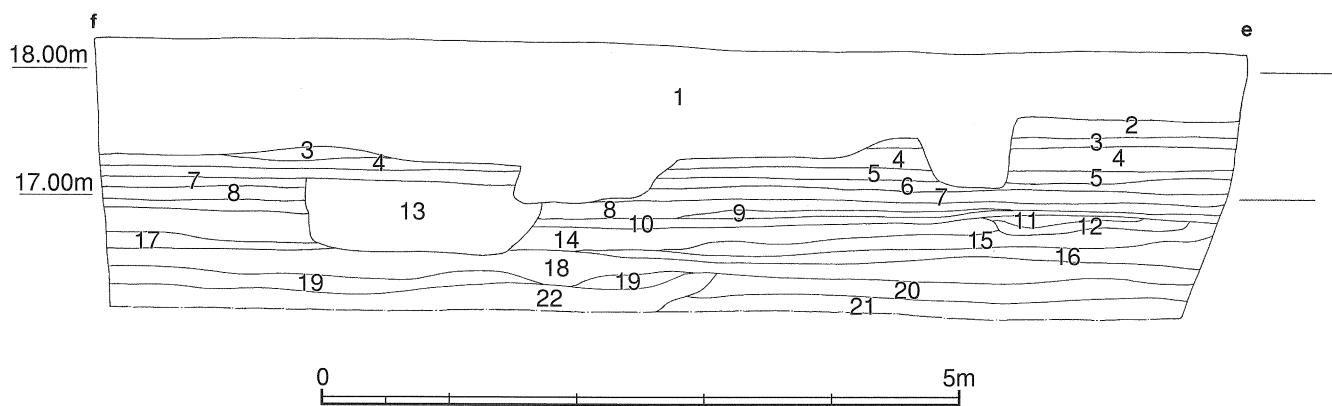
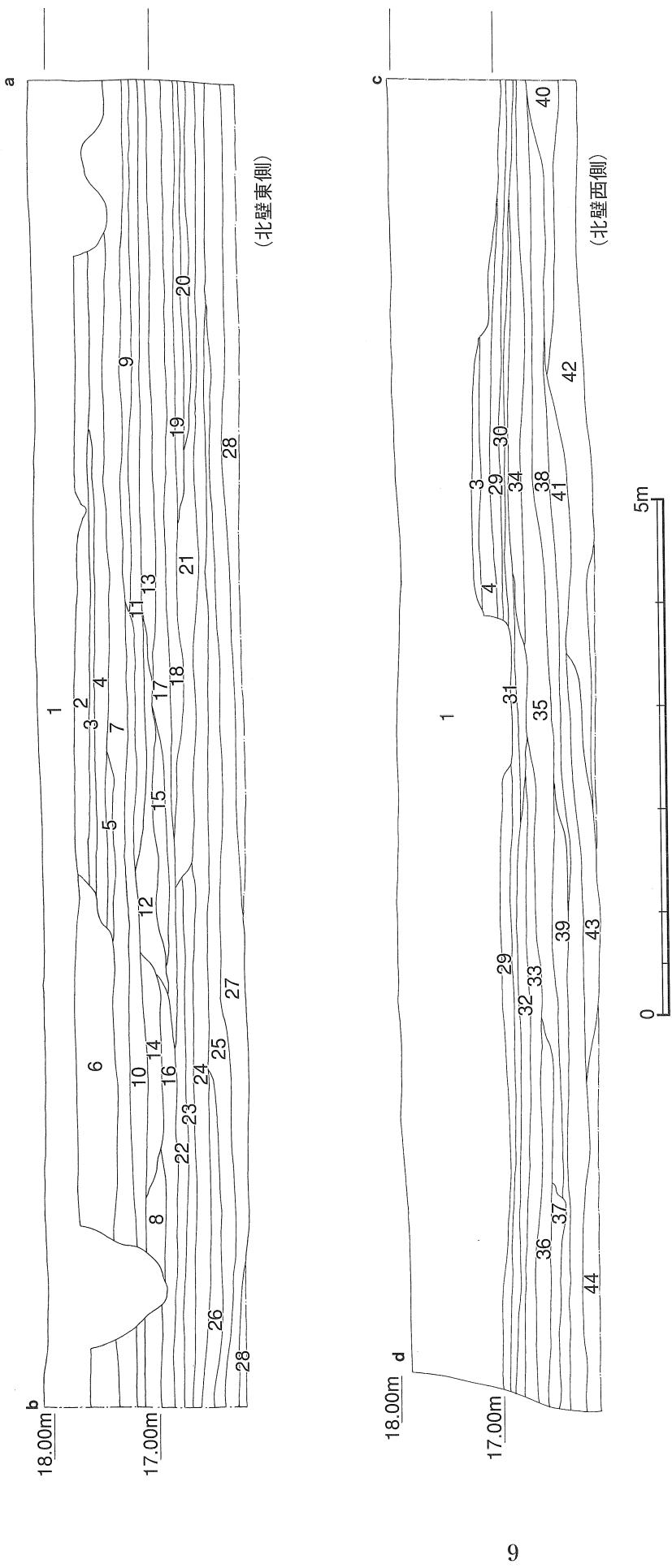


図7 土層断面設定図



- 1. 盛土・攪乱 2. 暗灰色砂質土 3. 灰黄色砂質土 4. 灰色砂質土 5. 淡灰黄色砂質土 6. 淡灰褐色砂質土
- 7. 暗灰褐色シルト質砂 8. 褐灰色シルト質砂（遺物包含層） 9. 淡灰茶色粗砂 10. 黑茶褐色シルト混じり細砂
- 11. 暗黄橙褐色細砂 12. 黑褐色シルト混じり砂（11と同じくSD202埋土） 13. 暗渠 14. 黄橙褐色砂～細砂
- 15. 淡灰茶色細砂 16. 黑褐色シルト（遺物包含層） 17. 黄橙褐色極細砂 18. 灰黑色粗砂混じりシルト
- 19. 暗黄灰褐色粗砂 20. 黑灰色粗砂混じりシルト 21. 暗灰綠色シルト 22. 黑灰色シルト混じり粗砂

図8 12区北壁土層断面図



1. 盆土・攪乱
2. 旧耕土
3. 灰色砂質土
4. 淡灰黄色砂質土
5. 黄灰色細砂
6. 灰黃色砂質シルト
7. 淡灰褐色砂質シルト
8. 灰褐色砂質土
9. 暗褐色砂質土
10. 茶褐色シルト混じり砂
11. 淡灰褐色砂
12. 淡灰黃色細砂
13. 灰茶色粗砂～砂
14. 淡茶褐色粗砂
15. 灰黃色砂
16. 淡灰茶色細砂
17. 灰黃褐色シルト混じり砂
18. 淡黃褐色細砂
19. 黑褐色シルト質細砂 (遺物包含層)
20. 淡黃褐色砂
21. 黃褐色粗砂
22. 淡黃灰色シルト
23. 黄褐色砂
24. 黑褐色シルト (遺物包含層)
25. 淡灰黃色シルト
26. 淡黃灰色シルト
27. 灰黑色粗砂混じりシルト
28. 灰黃色砂質土
29. 淡灰褐色砂
30. 灰黃色砂質土
31. 暗灰色シルト質砂
32. 黑褐色シルト混じり砂 (SD202埋土)
33. 淡灰茶色砂
34. 灰黃茶色粗砂
35. 淡灰茶褐色粗砂
36. 黑褐色シルト質砂 (遺物包含層)
37. 黑褐色シルト質砂 (遺物包含層)
38. 暗褐色シルト混じり砂
39. 黄橙色砂
40. 暗黃青色シルト質細砂
41. 黑灰色粗砂
42. 暗灰色シルト質砂
43. 淡灰茶色砂
44. 暗灰青色シルト質細砂

図9 2区・北壁（東側及び西側）土層断面図

2. 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物

i) 遺構面の概要

第3遺構面 第2遺構面を形成している淡灰褐色細色砂層と遺物包含層である黒褐色砂質シルト層を除去すると褐色粗砂混じりシルト層の第3遺構面となる。調査地東端で土坑が4基確認された。一部の調査区においては、遺物包含層から摩滅した土器が僅かに出土したのみである。調査区全体に建物の基礎杭が打設されたため、その箇所について部分調査を実施した。それぞれ最終遺構面に相当する面を確認しているが、遺構の存在は皆無で、その面の下層に土壤化層が見られるが、全く遺物を含んでいなかった。今回の調査は、工事掘削深度の関係もあり、1区の一部、3・11・12・13区だけの調査である。

ii) 遺構と遺物

調査地東端の調査区である1区の北端でSK301、SK302の土坑を検出した。また、北側の東西に長い調査区である13区の東端ではSK303、SK304の土坑を検出した。

SK301 SK301は、直径約110cm、幅約80cmの楕円形の土坑である。深さ20cmで底部はすり鉢形をしている。埋土内から土師器片が出土しているが、細片のため時期については判らない。

SK302 SK302は、最大長約240cm、深さ50cmを測る土坑である。断面は逆台形を呈しているが、調査区外に広がるため規模については不明である。遺物が埋土内から少量出土している。

2・3・4は甕の底部である。いずれも体部外面に右上がりの平行叩きが施されている。底部付近はナデが施されている。

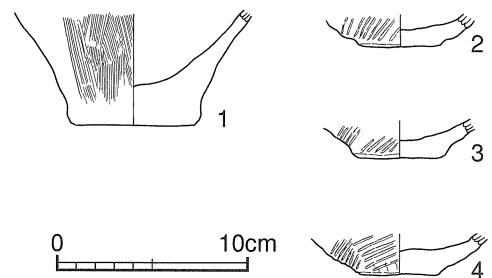


図10 SK302・SK303出土土器

SK303 SK303は、最大長約250cm、幅約150cm、深さ約15cmの浅い窪み状の遺構である。遺物は、1が出土したのみである。弥生時代の甕か壺の底部である。体部外面に縦方向の刷毛目調整が施されている。底部付近はナデが施されている。

SK304 SK304は、長さ約110cm、幅約70cm、深さ約15cmを測る土坑である。埋土内から土師器片が出土しているが、細片のため時期については判らない。

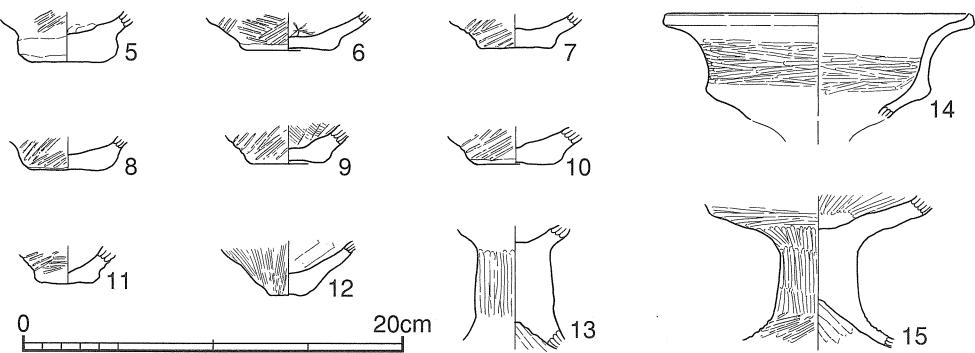


図11 黒褐色砂質シルト層出土土器

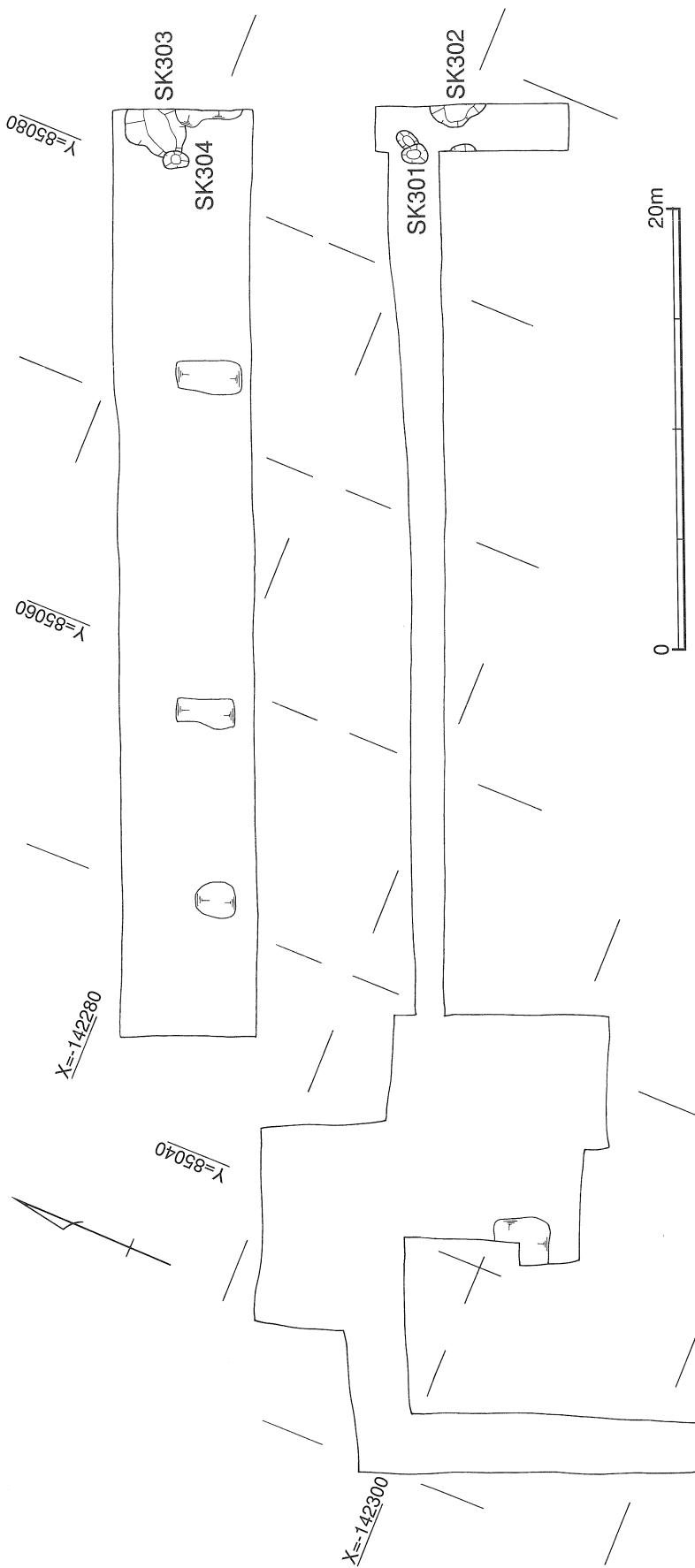


図12 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面

- 遺物包含層** 遺物包含層である黒褐色砂質シルト層からは、5～15の土器が出土している。5～12は甕の底部である。いずれも体部外面に右上がりの平行叩きが施されている。内面の調整で観察できるものは、刷毛調整後ナデ調整が施されている。12は播磨型の甕と考えられる。体部外面を縦方向の細かい刷毛目で調整している。
- 高杯** 13は高杯で、杯部・脚底部を欠損する。脚部の外面は縦方向のヘラ磨き調整によって仕上げられている。14は高杯で口径に比して深い杯部をもつ。内外面とも横方向のヘラ磨き調整によって緻密に仕上げられている。15は高杯で、口縁部・脚底部を欠損する。内外面ともヘラ磨き調整によって丁寧に仕上げられている。
- 黄橙色砂層** 3区の第2遺構面を形成している洪沢砂の黄橙色砂層から16～22の土器が出土した。
- 出土土器** 16は球形の体部をもつ甕である。外面上部は右上がりの平行叩きで、下部は縦方向の平行叩きである。内面は板ナデを施している。17は甕の胴部である。外面上部は右上がりの平行叩きで下部は縦方向の刷毛目で調整をしている。内面は板ナデを施している。
- 鉢・器台** 18は小型の鉢である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く収めている。体部内外面をヘラ磨き調整により丁寧に仕上げている。底部は平らである。19は中実の小型器台である。体部は内湾して広がり、口縁部は上につまみ上げている。体部内外面ともナデ仕上げを施している。20は小型の鉢である。体部外面に右上がりの平行叩きを施しすり消している。内面はナデを施している。
- 高杯・砥石** 21は稜をもつ高杯の杯部である高杯で、脚部を欠損する。調整は体部内外面をヘラ磨きにより仕上げている。22は砥石である。形態はほぼ直方体で、現存値で長さ15.5cm、幅5.0cm、厚さ3.1～4.2cm、重さ409.4gである。材質は粘板岩である。主面2面は表面の剥離が著しく、2側面には使用したと考えられる線条痕が長軸方向に僅かに認められる。

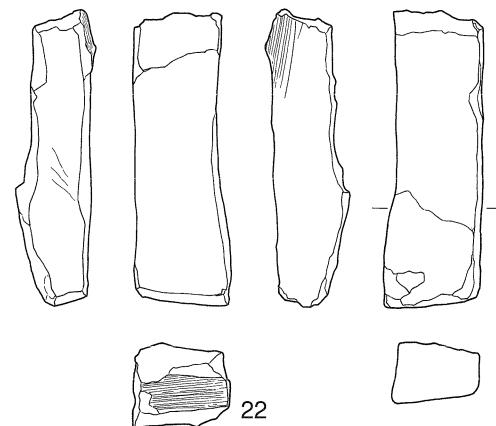


図13 黄橙色砂層出土石器

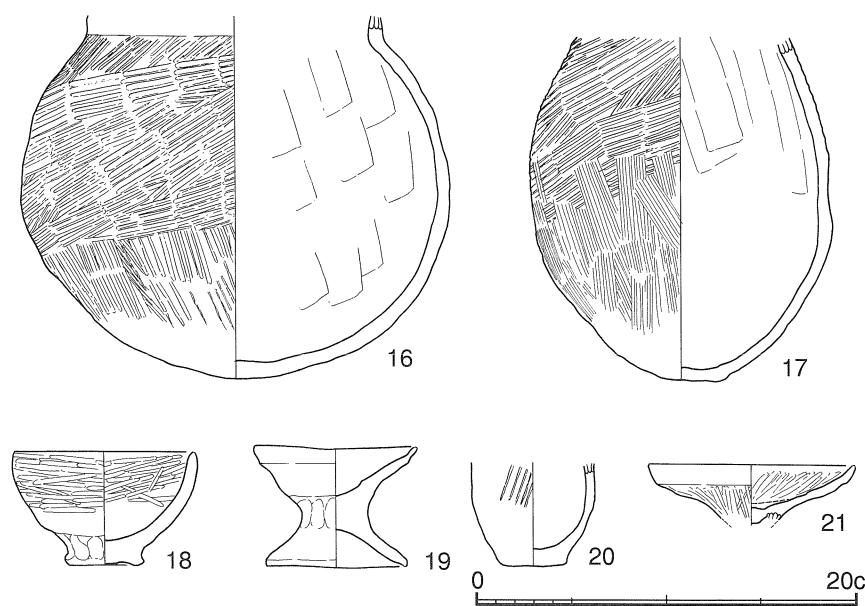


図14 黄橙色砂層出土土器

3. 古墳時代後期・平安時代前期の遺構と遺物

i) 遺構面の概要

第2遺構面 調査地中央より西側の3区・12区において、古墳時代後期の溝2条、ピット列を検出した。そして、調査地の北側の13区では、平安時代前期頃と考えられる遺構面を検出し、掘立柱建物1棟、柵（或は塀）2基、溝1条、ピットを検出した。

ii) 遺構と遺物

SD201 3区の中央部で検出されたSD201は、幅約90cm、深さ15cmの北西から南北方向の溝である。
出土遺物 出土遺物である23の須恵器の坏身のたちあがりは短く内傾気味で、受部は外方にのびる。24は鉄製刀子の破片と考えられる。背側に闊を持ち、残存長4.5cmである。残存する身部は2.4cm、茎が2.1cm、身幅は1cm、茎幅7mm、重量2gを測る。



図15 12区 SD202実測図

- SD202** 12区は北西から南東に傾斜していて、SD202とそれに沿う形でピット列を検出した。
- 出土遺物** SD202は、幅20~35cm、深さ10~15cmの南北方向の溝である。出土遺物は25・26の須恵器坏蓋である。26の天井部は丸みを持ち、ヘラケズリの範囲は1/3程度である。SD202の西側で検出したピット列から遺物は出土していないが、溝に沿うように並んでいたため同時期と考えられる。各ピットの規模は、径約30cm、深さ15~20cmである。
- 調査地北側の13区で掘立柱建物1棟、柵或は塀2基、溝2条、ピット等を検出した。
- SB201** SB201は、調査区中央で検出した掘立柱建物である。桁行2間以上、梁行2間である。主軸はほぼ真北を示している。建物の北側は調査区外に延びるため、全体規模は不明である。柱穴の間隔は、桁行間が2m、梁行間が1.5mを測る。柱穴の掘方は、一辺50~70cmの不定円形で、検出面からの柱穴の深さは5~30cmであるが、これは遺構

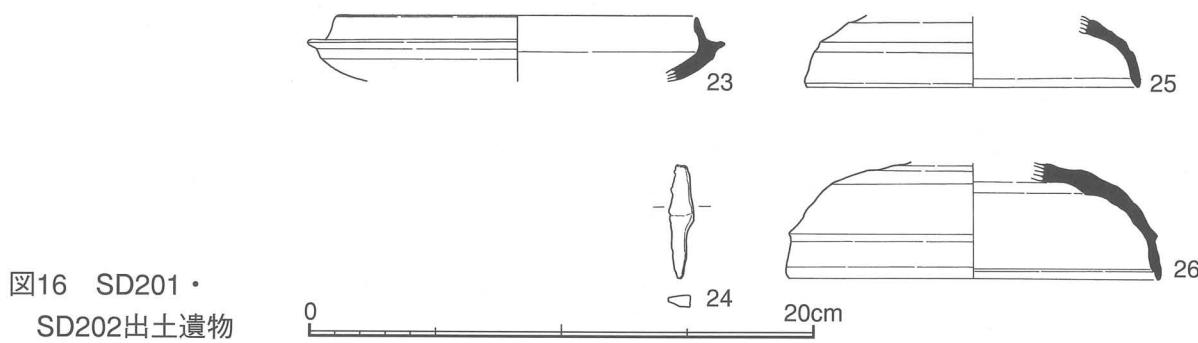


図16 SD201・
SD202出土遺物

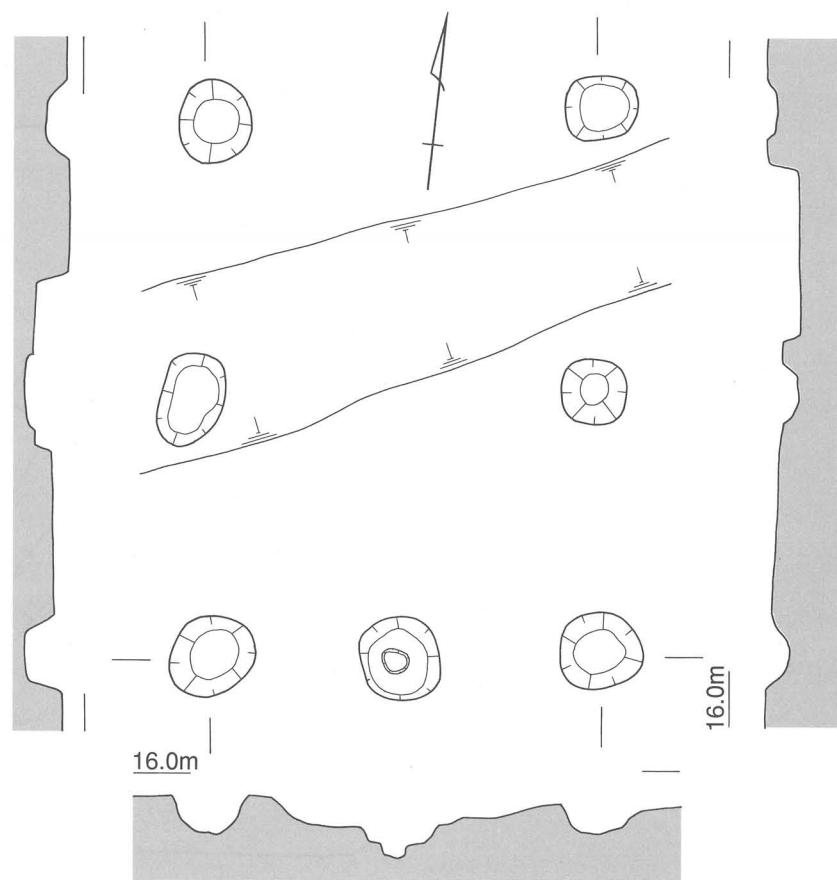


図17 13区 SB201実測図

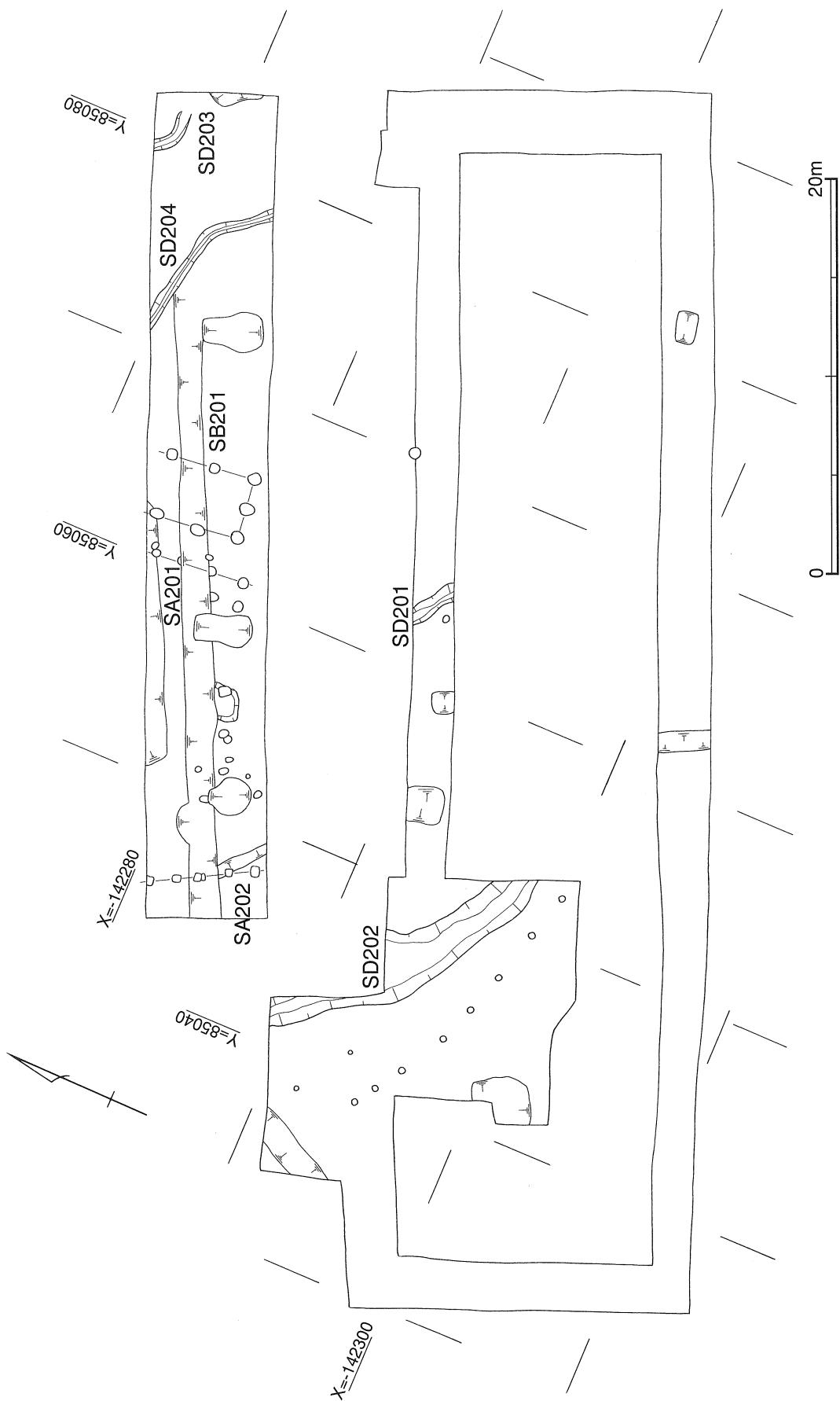


図18 古墳時代後期・平安時代前期の遺構面

面が後世に削平を受けたと考えられる。S B 201の時期は、柱穴内から遺物の出土がなく不明であるが、第33次調査で報告しているS B 101の主軸とほぼ同じであるため、この建物と同時期であると考えたい。

SA201 S B 201の西側で検出したS A 201は、建物のそばに付随しているため柵或は塀の可能性が高い。南北方向に並ぶ柱の間隔は1.4~1.6m、柱穴の掘方の平面形は円形で、径約50cm、検出面からの深さは15~20cmである。

SA202 調査区西端で検出したS A 202は、S B 201・S A 201と違い方位がやや西側に振っている。検出された柱穴は5基あり、方形の掘方をもつ。柱穴掘方は一辺40~50cm、検出面からの深さは20~30cmである。いずれの柱穴からも遺物が出土していない時期は判らない。

SD203・204 調査区の東側では、溝2基を検出している。S D 203は、幅約60cm、深さ約10cmであるが、溝が途中で削平されているため全体規模については判らない。S D 204は西から南東方向に延びる溝で、幅約45cm、深さ約10cmである。ともに土師器片が出土しているが細片であるため時期については判らない。

第2遺構面を覆う遺物包含層からは、27~32の須恵器と33の土師器が出土している。

27は、口径13.8cmの壺蓋である。口縁端部は丸く収めている。28は壺蓋である。口縁部は緩やかに外側に開く。29は壺身である。口縁のたち上がりは短く内傾気味である。口縁端部は丸く収めている。30は口径12.0cmの壺身である。たち上がりは短く内傾気味である。31・32は壺身である。受部は上外方にのびるが短い。33は長さ11.4cm、幅9.3cm、

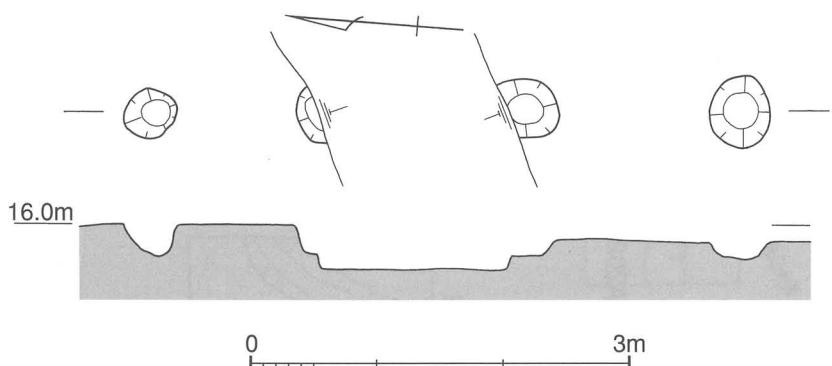


図19 13区 SA201実測図

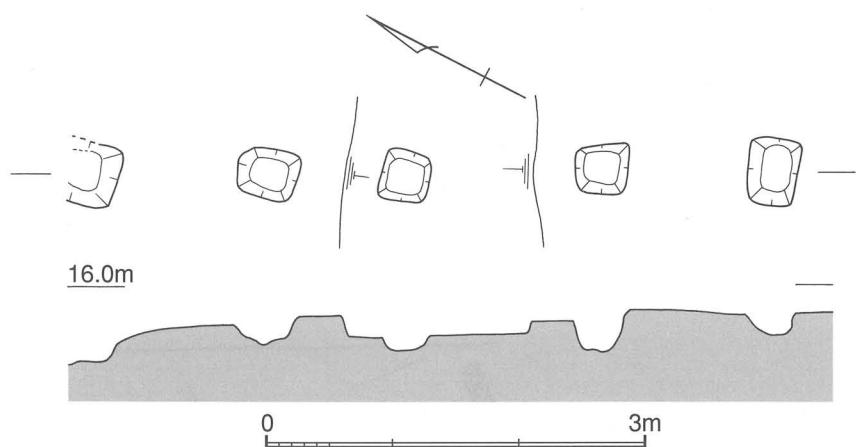


図20 13区 SA202実測図

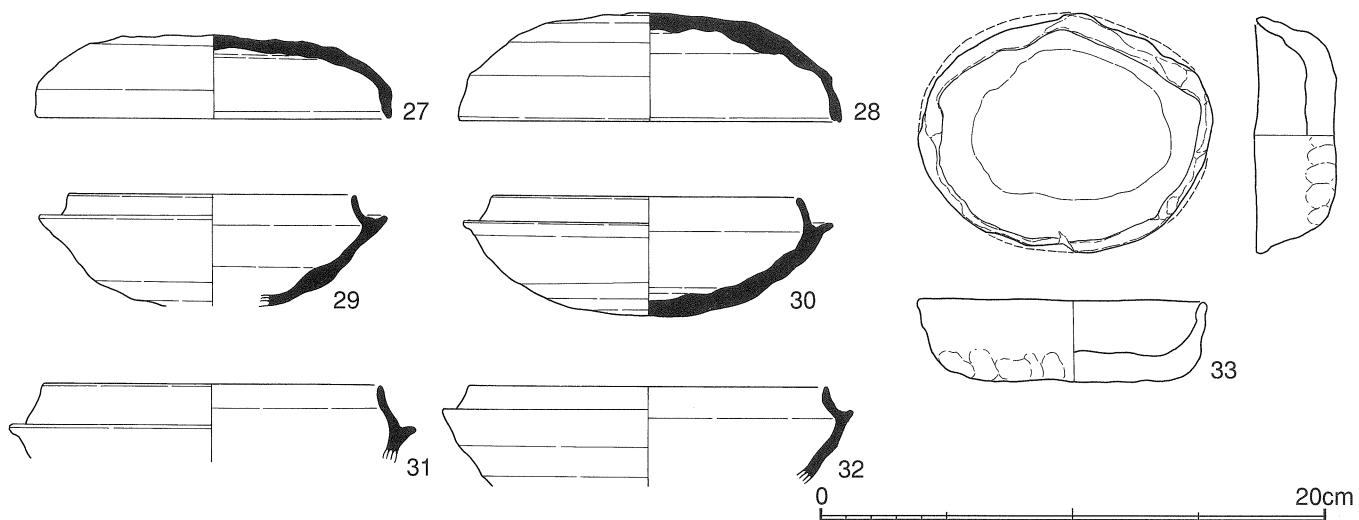


図21 黒褐色シルト層出土土器

器高3.2cmの手づくねの土師器の皿である。口縁から体部外面は指でオサエタ後ナデを施している。底部はナデを施し、内面もオサエタ後ナデを施している。

4. 第1遺構面の遺構と遺物

i) 遺構面の概要

第1遺構面 洪水によって堆積した明黄褐色細砂～粗砂の第1遺構面には古墳時代後期～平安時代頃の遺物を含み、その上層には茶褐色シルト混じり砂が堆積している。この遺構面は、南側に向かって緩やかに傾斜している。平安時代後期と考えられる遺構面では、調査地の北側と東側に遺構が集中しており、溝・土坑・ピット・落ち込みなどが検出された。

ii) 遺構と遺物

1区から4・5区にかけて東西方向の溝を4条検出したが、いずれも深さが5～12cmと比較的浅い溝である。S D101から古墳時代後期の須恵器片が出土しているが、下層からの混入遺物と考えられる。

1区と2区の交差するところで、楕円形状の土坑（SK 101～103）3基を検出した。SK 101は、長さ約80cm、幅約60cmの土坑で、土坑内から遺物が出土したが、細片のため時期については判らない。SK 102は、長さ約110cm、幅約70cmの土坑で、内部から中世頃の須恵器片が出土した。SK 103は、長さ約150cm、幅約90cmの土坑で、内部から古墳時代後期の須恵器片が少量出土しているが、下層からの混入遺物と考えられる。

13区では、溝1条、土坑、不定形遺構、ピットを検出した。東端で検出したSX 101は、深さ約25cmを測る窪み状の遺構であるが、攪乱が著しく全体規模については判らない。埋土の中から中世頃の須恵器片が出土した。調査区の中央部で検出されたSX 102は、長さ約190cm、幅約130cm、深さ約15cmを測る土坑で少量の土師器片が出土したが時期については判らない。西端で検出されたSD 104は、南北方向の溝である。幅70～80cm、深さ約15cmであるが、少量の土師器片が出土したが詳細な時期は不明である。

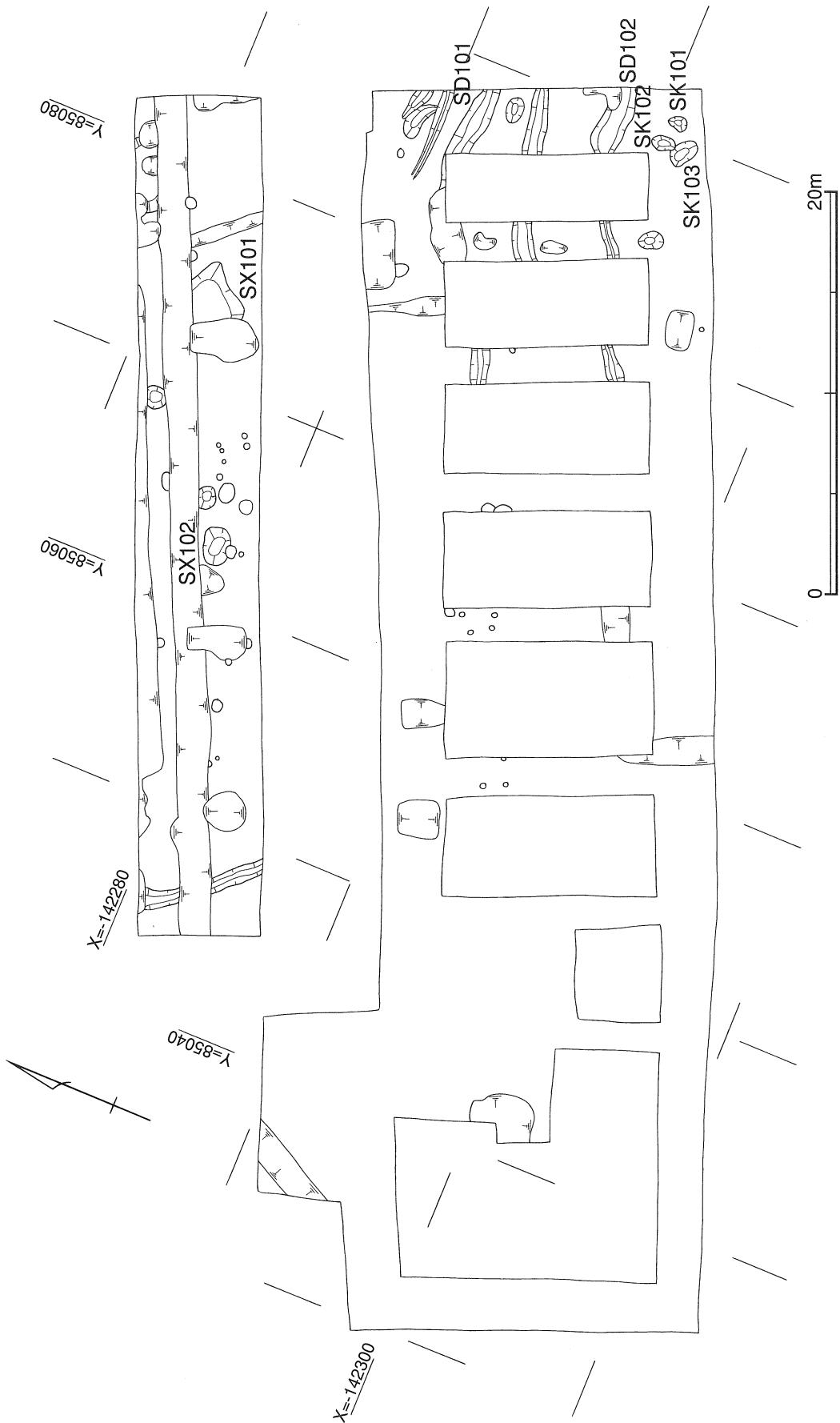


図22 平安時代後期の遺構面

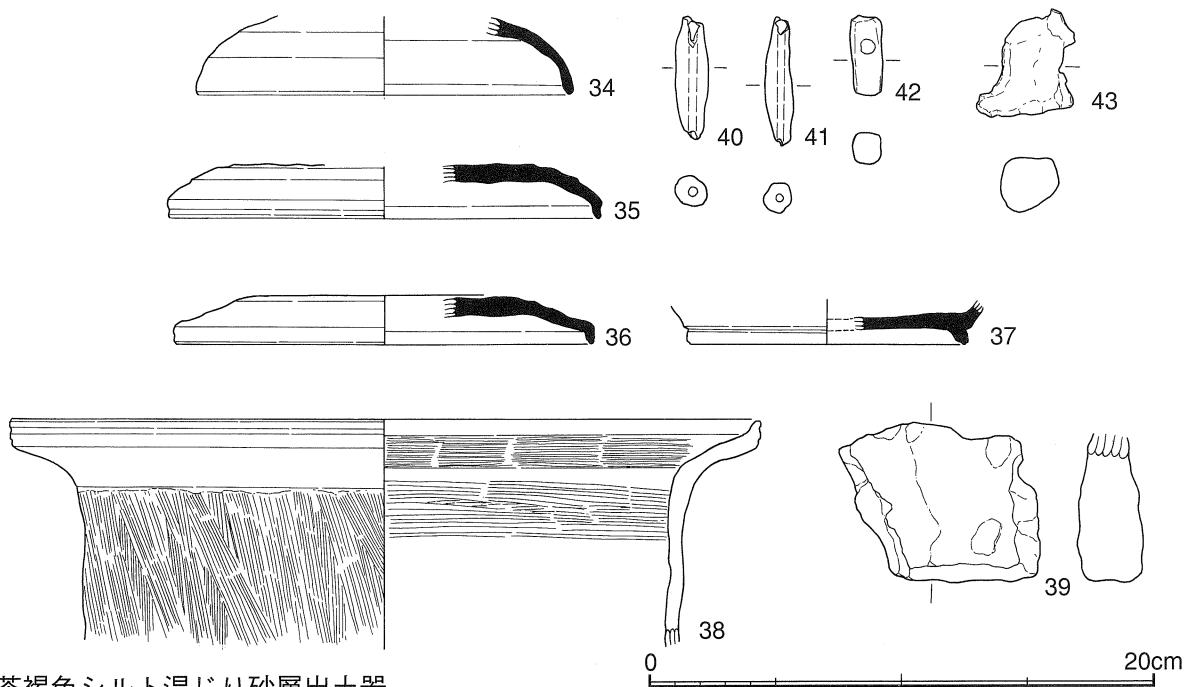


図23 茶褐色シルト混じり砂層出土器

出土遺物

遺構内から出土した遺物で図化可能なものはないが、遺物包含層である茶褐色シルト混砂からは34～43の遺物が出土している。

35・36は須恵器の坏蓋である。平らな天井部にやや肥厚した端部をもつ。37は高台をもつ須恵器の坏身である。38は土師器の甕で、体部は長胴形を呈すると考えられる。体部外面は縦方向の刷毛目が施され、内面には横方向ナデがされている。

40・41は土師質の管状土錐である。40は長さ4.9cm、最大径1.3cm、孔径4mm、重さ6.2gである。41は長さ5.0cm、最大径1.1cm、孔径3mm、重さ6.0gである。42は土師質の棒状有孔土錐である。現存長3.1cm、孔径5mm、重さ6.0gである。

43は鉱滓である。X線透過像からは内部に鉱滓特有の気泡が観察でき、表面に膠着した鉄サビおよび弱い着磁性を有することから、鉄滓であることがわかる。成分分析を実施していないため詳細は不明であるが、外形は不定形の流动滓であり製鉄もしくは精錬、铸造などに伴う滓と考えられる。重量は9.7gを測る。

III. まとめ

1. 第3遺構面（弥生時代後期～古墳時代前期）

第11次調査において第5遺構面と報告されている遺構面に相当する。調査地の北側の調査では弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴住居を検出しているが、調査地の東端で、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が僅かに検出されただけで、それ以外の遺構は皆無であった。面は北東辺については安定しているが、南に向かうにつれて不安定である。特に調査地の西端では、下層に砂礫層の堆積が認められ、谷状地形か流路の存在を窺わしている。下層に見られる土壤化した層は水田土壤の可能性が指摘されていたが、土層観察を試みたが、畦畔等の存在は確認できなかった。

2. 古墳時代後期・平安時代前期の遺構面

調査地内は南北に傾斜しているが、同一の遺構面と考えられる層で古墳時代後期と平安時代前期の遺構を検出した。

12区で検出した溝（S D 202）は地形の傾斜に対応するように南北方向に流れ、そしてこの溝に沿うようにピット列を検出した。ピットの規模が小さいため杭か柵のようなもので境界を明示していた可能性が考えられる。今回の調査において古墳時代後期の遺構は希薄であった。また、遺構面は幾度の洪水砂で形成されているため、面自体は軟弱である。今回の調査地は遺跡の南限にあたる可能性がある。

13区で検出した掘立柱建物（S B 201）は、柱穴からの遺物の出土がなく時期の決定に詳細を欠くが、北側に隣接する第33次調査において検出された建物と主軸をほぼ同じ真北に向いている点を考慮してこの建物と同じ時期としたい。

ただし、北西に隣接する第11次調査と東に隣接する第16次調査においても平安時代の掘立柱建物を検出している。平安時代前期の掘立柱建物は、第33次調査 - S B 101 と第37次調査 - S B 201、平安時代前期末の掘立柱建物は、第11次調査 - S B 02・S B 03・S B 04、平安時代後期の掘立柱建物は、第11次調査 - S B 01-1・S B 01-2 と第33次調査 - S B 102、そして、第16次調査の建物はこれらの建物と主軸の向きが異なっている。以上のことから、4つの異なった方位をもつ建物の構成が確認できた。このことは時期の違いもあるが、造営集団の相違を考えなければならない。また、周辺の調査が増えて掘立柱建物を検出すれば、この地域における建物の変遷を辿れる可能性がある。

3. 平安時代後期の遺構面

この遺構面においては、下層面と同様北側と東側において遺構が検出された。遺構内からの出土遺物が少なく、また、古墳時代後期の遺物が出土しているが混入とも考えられる。詳細な時期決定に欠けるが、遺物包含層の土器と周辺の調査の状況を考慮して平安時代後期と遺構面と考えたい。この遺構面を形成している黄褐色細砂～粗砂は古墳時代後期に起こった洪水による堆積層で、土層断面観察でも水平に堆積していないことが判る。特に調査地南半は、細砂～粗砂の堆積が繰り返して見られ、遺物は含まれるものとの遺構が希薄で、居住には適していないことが判る。

註

- (23) 竹村忠洋編『芦屋市文化財調査報告第34集『津知遺跡第17地点発掘調査報告書』芦屋市教育委員会 1999
- (24) 菊池逸夫・神野信（県支援）「住吉宮町遺跡第23次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- (25) 新修神戸市史編集委員会編「神戸の遺跡」「新修 神戸市史」歴史編。自然・考古 1989
- 喜谷美宣「郡家遺跡」『兵庫県史』考古資料編 1992
- (26) 丸山潔『住吉宮町遺跡第11次調査』神戸市教育委員会 1990
- (27) 菅本宏明・平田朋子「住吉宮町遺跡第29次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (28) 鐵英記・服部寛「住吉宮町遺跡第32次調査」『平成10年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1999
- (29) 菅本宏明「坊ヶ塚古墳試掘調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (30) 谷正俊「住吉宮町遺跡第16次調査実績報告書」神戸市教育委員会 1996

写 真 図 版



住吉宮町遺跡遠景（北から）平成11年撮影

写真図版1



1区 SK301・SK302（北から）



13区 SK303・SK304（東から）

写真図版2



12区 SD202とピット列（北西から）



13区 SD201（西から）

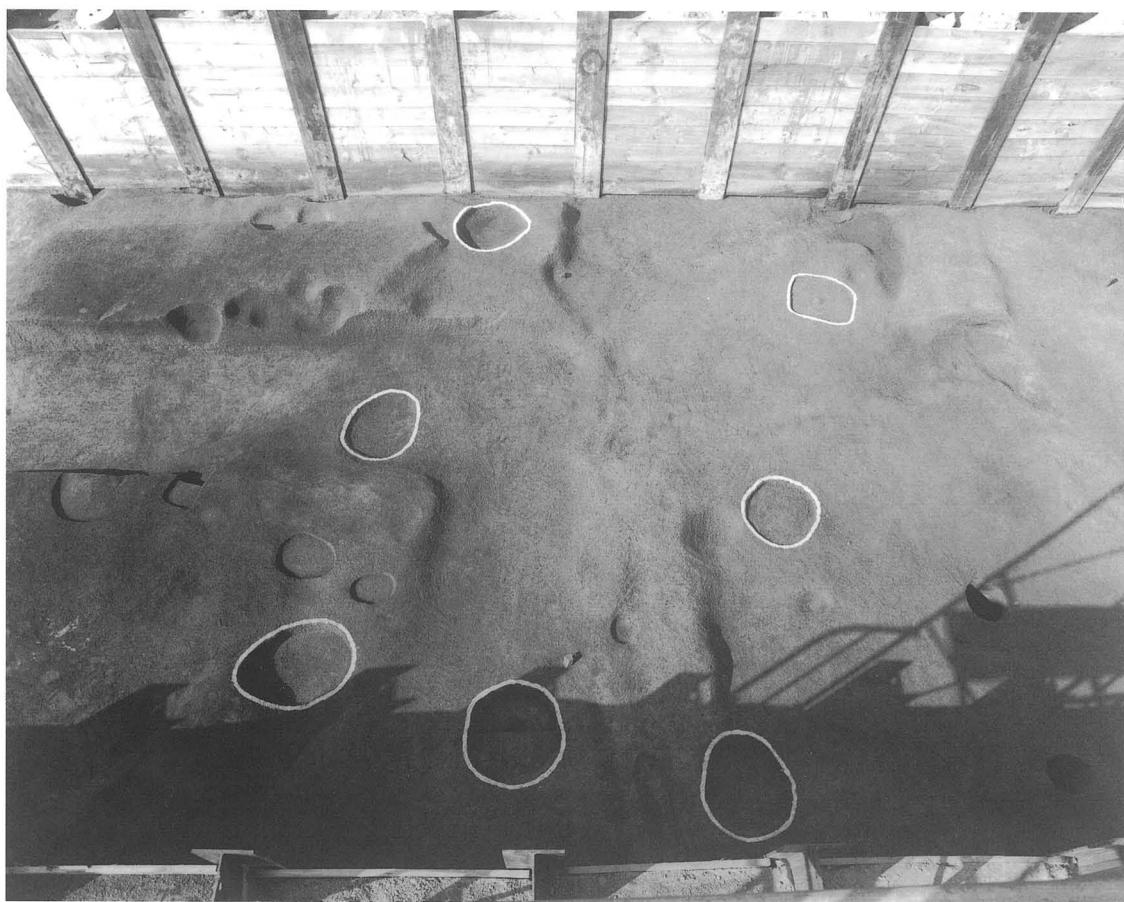
写真図版3



13区 第2遺構面（東から）



13区 第2遺構面（西から）



13区 SB201（南から）

写真図版4



13区 第1遺構面（東から）

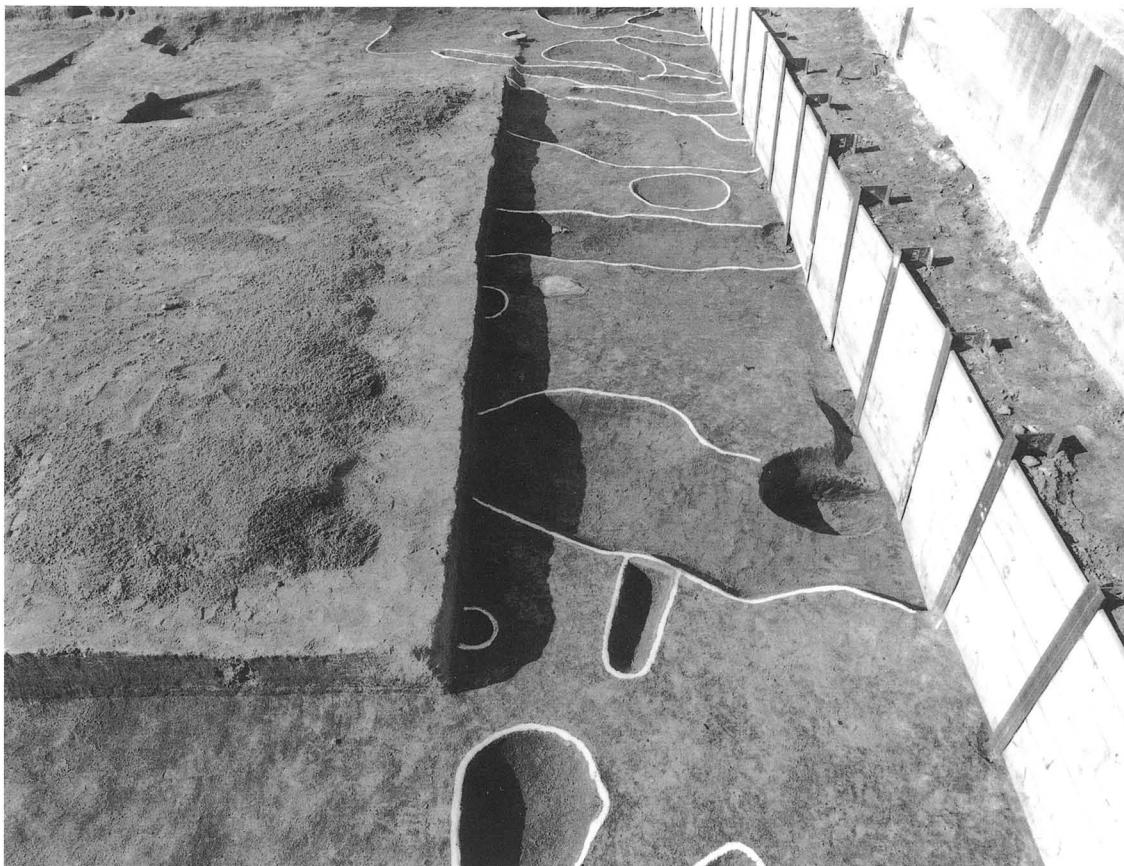


13区 第1遺構面（西から）



13区 SA201（西から）

写真図版5



1区 第1遺構面（南から）



3区 北壁土層断面

写真図版6



1



4



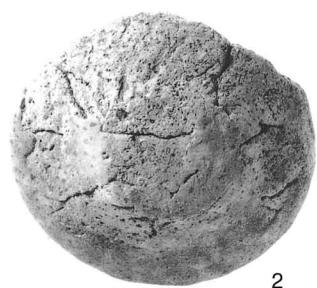
3

SK303出土土器



23

黒褐色シルト層出土土器

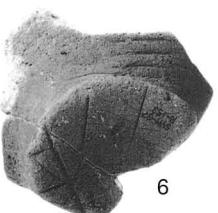


2

SK302出土土器



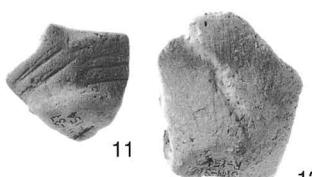
5



6



7



11

12



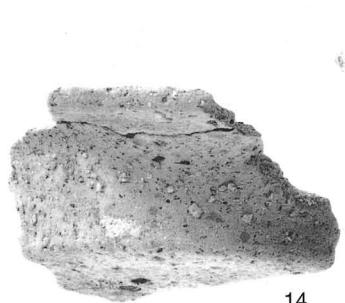
9



8



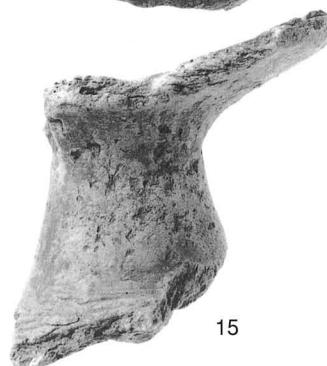
10



14



13



15

黒褐色砂質シルト層出土土器

写真図版7



20



21



18



19



16



17

黄橙色砂層出土土器

写真図版8



27



23

SD201出土土器



25



26

30

SD202出土土器



28



31



32



29

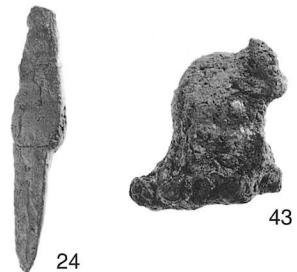
黒褐色シルト層出土土器

写真図版9

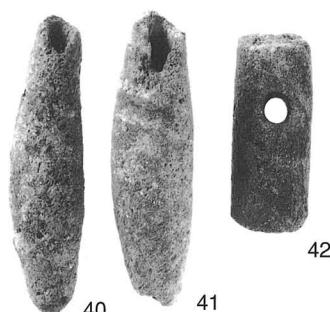


22

黄橙色砂層出土石器



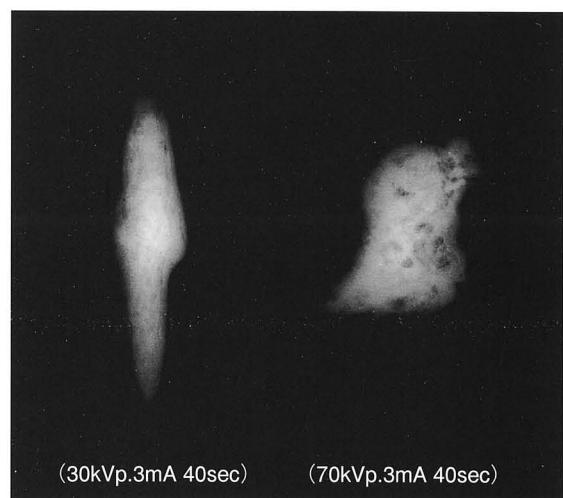
43



40

41

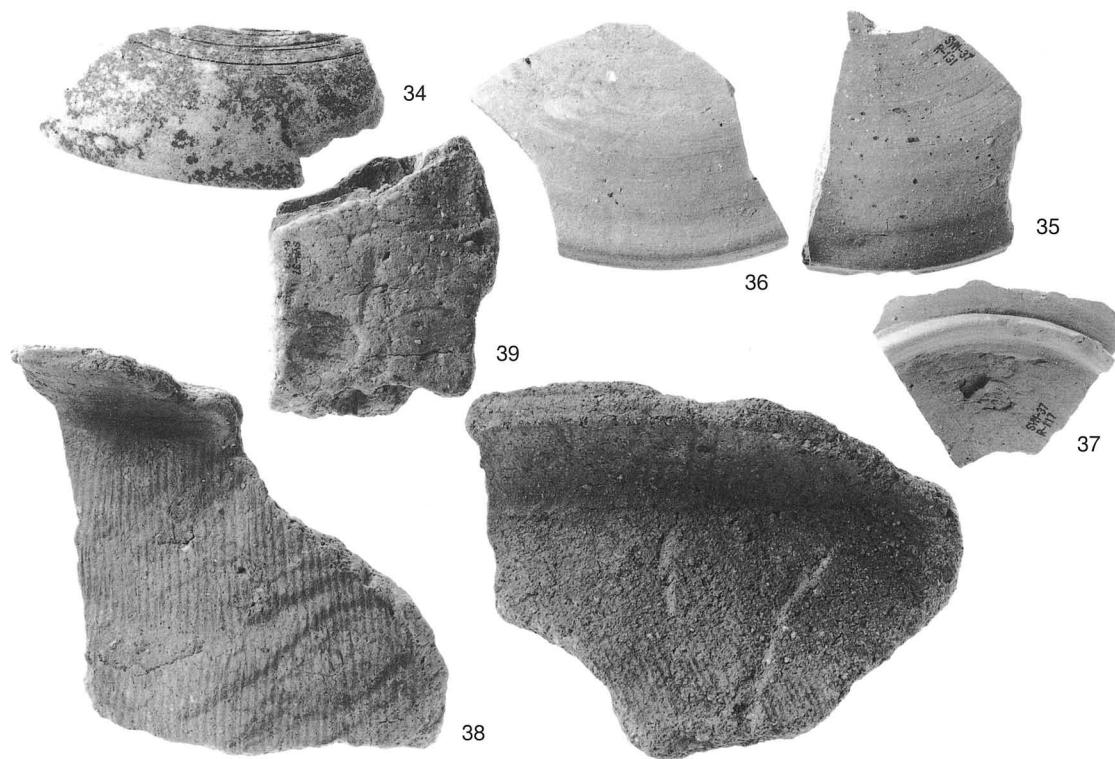
42



(30kVp, 3mA 40sec)

(70kVp, 3mA 40sec)

24はSD201、43は茶褐色シルト混じり砂層出土鉄製品



34

35

36

39

37

38

茶褐色シルト混じり砂層出土土器

報 告 書 抄 錄

| ふりがな | すみよしみやまちいせき だい37じちょうさ はっくつちょうさほうこくしょ | | | | | | | |
|--------------------|---|---------------|-------------|-------------------|--------------------|---------------------------|---------------------------|-----------------|
| 書名 | 住吉宮町遺跡 第37次調査 発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 編著者名 | 井尻格(編) 中村大介 | | | | | | | |
| 編集機関 | 神戸市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 ☎078-322-6480 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2003年12月25日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 (m ²) | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| すみよしみやまち 住吉宮町遺跡 | ひょうごけん こうべ し 兵庫県神戸市 ひがしなだくすみよしみやまち 東灘区住吉宮町 6丁目15-13 | 28101 | 1-39 | 34° 42' 49" | 135° 15' 43" | 20020918 ~ 20021120 | 900 | 民間マンション 建設事業 |
| 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | | 特記事項 | | |
| 集落址 | 弥生時代後期末 ~古墳時代前期 | 土坑 | 弥生土器 土師器 | | | | | |
| | 古墳時代後期 | 溝・ピット列 | 須恵器・土師器 | | | | | |
| | 平安時代前期 | 掘立柱建物 柵(塀) | 須恵器・土師器 | | | | | |
| | 平安時代後期 | 溝・土坑・落ち込み・ピット | 須恵器・土師器 | | | | | |

住吉宮町遺跡 第37次調査 発掘調査報告書

2003・12・25

発行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

印刷 株式会社 旭成社
神戸市中央区若菜通5丁目1-16-280
TEL 078-222-5800(代)